





諸國里人談卷之二

三 奇石部

○ 息瓶石 常陸  
 ○ 硬石 安藝  
 ○ 巫石 下野  
 ○ 姨石 信濃  
 ○ 名號石 相模  
 ○ 釣鐘石 披津  
 ○ 鬼橋 備後  
 ○ 龍洲 和泉  
 ○ 隱水石 紀伊

○ 要石 常陸  
 ○ 根矢鉾立 越後  
 ○ 救生石 下野  
 ○ 文字摺石 陸奥  
 ○ 蛙石 披津  
 ○ 京女郎 讚岐  
 ○ 石室殿 播磨  
 ○ 鴉飼石 甲斐  
 ○ 木葉石 出雲



里人談

二

一

- 琥石 越中
- 月糞 美濃
- 神石 出羽
- 栢葉石 陸奥
- 成大會 山越
- 髮切 伊勢
- 河童歌 肥前
- 血屋敷 江戸 出雲
- 天狗遊石 伊賀
- 斤輪車 近江

四 妖異部

- 水口石 近江
- 星糞 信濃
- 鷓鴣石 伊勢
- 御福石 上野
- 森雜 相模
- 窟天狗 江戸
- 鬼女 三河
- 窟女 伊勢
- 木葉天狗 遠江

諸國里人談卷之二

三 奇石部

○ 息柩瓶

常陸國息柩神の夜に海中に女瓶男瓶とて二の  
 奇石あり男瓶は徑一丈ありて瓶乃かたしその口と  
 ありき石に溝あり中の粒の多く盛て獨の瓶に女瓶の  
 より五六尺より土思にゆるり土俗日あるに神代の瓶子土  
 なりといはる満湖より二丈餘あり于海に水上にあつても  
 けるその瓶子の中は素水にて湖の味ひなりと云ふ也  
 氷とていふかあり人よりとてなり是れ其の深井のあり  
 ○人皇十五代若櫻官天皇御宇三癸未載二月鎮座の額あり

菊岡永山翁著

○長旅曰藤橋といふ橋の社所より十町むらり乃きそ  
今の藤橋より傳へさるる橋より多し傳へその西に傳へ  
つもの海出とよお風とさなるつすて埋めてるを  
先達の傳へるをいふとあるに社代よりさゆもるは傳へて  
いふに物もさるういふ傳へりいふ方の毛もよさるう  
母を傳へりいふとあるをいふたういふとあるいふ  
神を傳へるが傳へるをいふたういふたういふたう  
か傳へるをいふとある今に懸橋の海中にありありの撰集抄に  
藤橋のよりいふに懸橋の傳へるなり懸橋の藤橋の四地なり  
とある○又懸橋井の水の懸列山内にもあり 藤橋の懸橋の  
伝へるをいふとあるいふとあるいふとあるいふとある

○要石

常陸國藤橋の神にびとりの神あり丸く柱のあり  
けし舟一尺五寸さるり頂きか窪あり也をいふ事上天余  
その根のありさるり幾丈とらふ深きくは動せをゆるぐなり  
其の木の根をいふて穿れし虫のつるそのむしの敷を  
幾人のいふとあるをいふとあると云土俗の伝なり  
本書曰光徳社にあり傳へる社より傳へるにわく乃  
神ありと不問の伝をいふに二三所をいふ事のいふにあり  
いふに沙夜女を古き社名といふてあること平なるに  
因なり二三尺さるりなるやあるとあるに傳へるにさるるあり  
とてあるありいふ所の中に埋めて傳へるをいふとある

いそらうい明神おまてうあひてはるのうへを  
せさるるあし方葉集はるのみあしとあるい  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの  
先徳神

○ 硯石

安藝國加部庄金龜山福王寺の什物奇なるあり  
清和天皇貞觀五年のま紀行國千里の深きあふく  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは  
たは自御所の百餘年いしあふぬあつるあらしあ  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは

まのあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは

あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは  
あふぬあつるあらしあゆまのたのふの硯石ありは

昼夜鳴動するものありて激震の網をゆるし其後より  
 大江懸え地中へ入るに雷の如くは鳴動は一途先  
 福王寺へ逃れ持ちし時二人史八人をしやりく運ぶ  
 時二人一人一人とせし又福徳正別は寺に集りて  
 一尺一尺の器物をわらせと扇をぬきしを縁に雨車油  
 雷電して大洪水してぐり今も高寺の什宝と伝

○根矢鋒五 并流倉石

彼後出羽の界より根矢浦より名海舟に内はる多天をわ  
 纏り百間余ありて根矢の鋒五と云はる寄生虫這の芥  
 石の頂より動きて天上とせしつるる皆半葉より産る  
 し根子寄生の空貝まの如くあり○又根矢浦より生

三重出羽のふに嵐園とてありけよの石まを金と嵐の舎る  
 源のふにけりて宛あり

○煖石

信濃回煖捨ふに更神影ありて高山とせしとてさうなる  
 芝ふりの中傷を煖石ありて煖石を捨る所なりとて巖  
 高さ六丈五尺横三十丈あり石屏のふにけりて一面の云  
 軟ひ煖石ありてさうなる左なりとてさうなる石のふに  
 放光菴とて半堂觀音と観音と左のふに小敷りり  
 怪をくくしむむとて煖石のふにありとてさうなる十三景又て  
 絶景し僧所十三景あり煖石 冠着高 有明山  
 一重山 鏡臺山 室池 煙石 螺石 小佛石

椿木 更科川 千曲川 田毎月 等てし

大和の徳子云佐藤の由史柳の里に生むる男婦を布衣にして  
おやのあしひかひつゝいその女房はくはくしてまよさう  
しらをひめて平流をゆき山の奥に控えをたりとれとをい  
男のきりなきうかしくてもかの山の縁より出るる月をかう先  
一糸月もわりのかかしく入はくしくと音をよそ又いきて  
むくもてまふらうとれありのおととん山と云う

我んなくとれうの史柳やあまをそひよてる月をそて  
予てそを母をすくくはまうらうの時

漆喰の屋ととも 東乃あまう船 治承

日りの孤深云は向の事柳と向の事長は桑のの坂登は話と

石 硯

左 鋒の矢 標



○文字摺石

陸奥國信夫郡にあり柔折より半里と云ふ招節尾川のほとりあり長一丈二尺幅六尺と云ふの石しその表に背裏の方上にわらわらびしは石の上に忍草と布て衣と優てよふりおもをわくは忍の紋より後よりそ尚雨のる産として上古任國のて都への土産にして甚本奇しけりとして後を乳と云ふに紋を摺らうと云ふ乳もそを云ふと云ふありと云ふありと云ふ

○名號石

相模國足柄下郡國府津真樂寺に高七尺二寸幅三尺身の石に觀音上人指はく書はく十字八字の名號二行にして其後自處入り文字鮮なり是るは元年中華より

一切經を鎌倉より渡り其處に此石あり石の後のみくし上金を足はり是石は天竺の石と指はく書はく名號の石と號はく書はく其後又如上人回國の時茲に有る石の石は加へたり

其文曰 右志者為鏡空行光第一向專修念佛會等

建武元戊十一月十二日自敬白

或時疾人ありては石と湯中に沈む應く海の西より南を致ら其桑く糸と考へ水練の考を入くおもをるるに則けるなりと云ふ引上堂を造り茲に安置と云

○蛙石

抄摩國東生那村林寺村の庚辰の暮より寺の敷ひは石のうへをすんを石の頂より割く口をひくくおもくはりて









梵天帝教天々より降りて居る所の春屬は見えて一夜の内に  
今々此の心はつるつるびりびりて格をこころ惜むて涙を  
降り流りけりるもの地獄に墜つて今今と云ふ今今と云ふ  
二年も生かされて心とびりびり

○鶴飼石

甲斐國石和川より日蓮上人漁夫善抱のめ法華經一巻に  
一字は去て川より流れぬ吊り居りて今この文は流す  
は川よりあり奉承は揚げ付けりて今適いれどと降とく  
まことこの権者の筆跡奇なりと云ふ一〇又人の心は去て  
流るる法あり茶耳子の油はく曇とまうて居い出射へ石  
中に通して流すとして茶耳子の油は物をよく通す

ものぬに何の意に入ても漏れし但王子の意に入るとは

○龍淵

和泉國龍岡郡家系寺のこのくんに布龍淵と云ふあり  
深く七八寸の穴あり其中の水早天に涸れぬるに流すに  
ゆゑ早魃の討はるる雨と行るに疾ぬるにゆゑまは  
其傍に白龍淵と云ふあり人か一窟めり雨降く雨  
は一滴たまりて深く入て流るる

○柏葉石

陸奥國南部郡佐野の刻受大伴の洞基なり大伴  
けいすく後麻呂修治あり一洞遺帝なりをれ柏の葉  
をくして石の字ありびりびりとしてその名は二丈と云

唐く耕て去三寸幅一寸の柏の葉の形にして文  
ありやむ人ほしとて移るるを 燒山の事 妻山野奇見

○隱水石

紀伊國那智山阿彌陀寺の門前に高七尺の大岩に穴あり  
湖の儲子いそくひは穴の水増成に  
妙法山河泥泥寺とて唐の惠果和尚妙法の傳あり大所自  
俗に女人の高野とていひ也

○木葉石

出雲國嚴美大社 林森大社より石あり故石とて指擲の葉の  
ふのやうにあやしくなるをいふ事とて割る中に花あり

上社の素戔嗚命 下社天照太神し十二月除夜に奉あり

○姥石

我中國立山阿彌陀の如く懐よ姥石と云ふむむ一石狭國  
小浜より止守呂屋より女僧ありなり元より高の女人結界の  
地なりと推て泰んとしてて壯の女一人童女一人付ひけり  
湯川の上には壯女忽化して松の末くさるるもそを女松と  
云り彼童女怖く進み海に老女尿とてなすは海とて  
奪り老女その尿の跡定とて深き水に歩み殊とてを  
以て西又飯のくさるる所係に女船がひて忽ち海に  
傳のる船の付室として今にありと云

○水口石

近江國石橋に在る傳の大井と云ふ處より大力の女ありけり



俗に鬼ヶ岩と云ふ方十間と云ふ所あり其の五色は大なる洞窟に  
 湧き出たり船あり入る事一町餘り奥に女の事世ありたり  
 方八九尺の穴あり先年山伏の行者ある人然るに入らばあり  
 九一里と云ふ所を所せり其の奥と云ふ所にて解りたりと  
 云ふ事あり○取上岩 大なる石あり其の石は海にあり其の  
 石あり波をたたく事あり其の上の石を浪中より取りて  
 舟に置く事あり其の石の重きと云ふ事あり其の石の奇し  
 土人の云ふにけしきあり其の石の重きと云ふ事あり其の石の奇し  
 と云ふ事あり○秘隠崖 此の崖に船を入る事あり其の崖に  
 入りては船をたたく事あり其の崖の重きと云ふ事あり其の崖の奇し  
 ○編幅崖 編幅あり其の崖の重きと云ふ事あり其の崖の奇し

叫ぶ教百人の掛神は○大山捨 小山捨 鳥居のたたくたる水に  
 以てする所九高き四間と云ふ所の石を船に置く事あり其の石の重きと云ふ事あり其の石の奇し  
 間二十間大なる石の重きと云ふ事あり其の石の奇し  
 たり傳説あり其の石の重きと云ふ事あり其の石の奇し  
 女人結界世に此の所あり其の石の重きと云ふ事あり其の石の奇し  
 ○野崎石  
 伊勢國度會郡心田より西南五里と云ふ所の所あり其の石の重きと云ふ事あり其の石の奇し  
 里に水あり其の石の重きと云ふ事あり其の石の奇し  
 高さ九間と云ふ所の石の重きと云ふ事あり其の石の奇し  
 あり其の石の重きと云ふ事あり其の石の奇し  
 後小頃ホ一峰と云ふ所の石の重きと云ふ事あり其の石の奇し





世の望みのなりしを 秋の月夜に 後法に 信を 蘇りて 蘇りて  
又世に 下れぬ人の 具して 蘇りて 蘇りて  
日月を 居るに 法に 所を 蘇りて 蘇りて  
も 貴しと 只の 信を 蘇りて 蘇りて  
去りぬ 蘇りて 蘇りて 蘇りて 蘇りて  
雲の 蘇りて 蘇りて 蘇りて 蘇りて  
坐し 蘇りて 蘇りて 蘇りて 蘇りて  
空より 四種の 蘇りて 蘇りて 蘇りて 蘇りて  
音楽を 蘇りて 蘇りて 蘇りて 蘇りて  
ふめ 蘇りて 蘇りて 蘇りて 蘇りて  
わんを 蘇りて 蘇りて 蘇りて 蘇りて

わんを 蘇りて 蘇りて 蘇りて 蘇りて  
水飲の 蘇りて 蘇りて 蘇りて 蘇りて  
信者と 蘇りて 蘇りて 蘇りて 蘇りて  
も 蘇りて 蘇りて 蘇りて 蘇りて  
○ 蘇りて 蘇りて 蘇りて 蘇りて  
享保の 蘇りて 蘇りて 蘇りて 蘇りて  
蘇りて 蘇りて 蘇りて 蘇りて  
蘇りて 蘇りて 蘇りて 蘇りて  
蘇りて 蘇りて 蘇りて 蘇りて  
蘇りて 蘇りて 蘇りて 蘇りて







崎の傍より後方の火のありし所を尋ねて見れば、  
村中捧勝本にありしと云ふ事、怒りなく、  
汝ももつねと解りねひて、博考のありし朝期に、  
なりぬその趣、連子承の公等、以て例の如く、  
して崎の傍、信侶等、さき早稲少く、  
ありし白飯女、は、  
なりぬその趣、連子承の公等、以て例の如く、  
して崎の傍、信侶等、さき早稲少く、  
ありし白飯女、は、  
なりぬその趣、連子承の公等、以て例の如く、  
して崎の傍、信侶等、さき早稲少く、  
ありし白飯女、は、

○四屋敷

正保年中、武士の下女十の、  
也、其七、  
也、其七、

泣叫ぶ事、  
はあり又雲列、  
る也、  
○嵐の  
雲列を志部川、  
こゝは嵐の中、  
里人、  
さ、  
か、  
か、

以迄處必於其村の長の事ながらういせしげにいはの便をなれ  
海軍所小倉より渡列舟より引る迄の若大船はくし舟ぬ

○天狗遊石

修多國園山まじりあり天狗の控ひるをひつるるをわき八  
尺より以上平に切きるおとくけるがひ雁居ありて突  
底さしおつへりける均なし室氷のころ大守廣正の礼佛を  
寫さししとすの土を穿て谷へつさねくけとて何のさき  
落さる大勢の人まじりて日毎におとせし上野橋下の坂口  
中して二里とりの雨を引けりや日像は大白雨して雷世以  
覆はる人まじりて夜も今と昔もなしくゆきに静まりけりお  
件のお趣申しえの心とて引居りてあり傳へる事と止む

○本葉天狗

駿遠の境大井川に天物をるる事あり園なる夜深まに  
おきて階は封壇塘の海に志のひてくるぬに書のおくなる  
以翹の傳六尺とありある大木のやうなるもの川面よわきと就  
其りよりくさりて道をとるのせしきし人言をたて忽に  
おとりの是は俗に云傳亦と本の葉天物なりと云むしきん

○斤輪車

近に回甲賀郡に寛文のころ斤輪車とらよもの際あり  
車の碾者して行ありつるものよりおとりのををるに通に  
おとりの事少人の能入ておとりのををるにたはる夜更に  
おとりの市町も門を閉て静るは事と時時かきとれ

但合湯湯邑科王堂  
中屋其有衛門

七能より亦も言ひさうなわらふ山家の人一なりは怖れ  
 一向に怒りまゝにさうり或家の女房おとせたりけり  
 うの妻の身事付勝れ戸の御しどより取及もて宰人のめき車の  
 隙論りたる女一人をとりわらけ門にそて車とて由我る  
 ようとけしきまゝとて云いおとるも馴れ入て居るに二重の  
 のまよりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 一一首を書て戸に掛けて置たり  
 罪科の我れそとて小車の中よりさうりさうりさうり  
 その夜行輪車圓はなうりさうりさうりさうりさうり  
 し人に見えていさありさうりさうりさうりさうり  
 里人談二終

一片修の多つた  
 石比亦子言一  
 足出た人護  
 代あふす  
 ちあふす



